

2025 東京大学（前期）地学 概評

出題分析		
試験時間 2 科目 150 分	配点 60 点	大問数 3 題
分量 (昨年比較) [減少 同程度 増加]	難易度変化 (昨年比較) [易化 同程度 難化]	
<p>【概評】</p> <p>例年通り大問が 3 題出題され、天文、大気・海洋、固体地球という、第 3 問に地質・地史分野がない出題パターンであった。第 1 問は銀河回転とケプラーの法則、第 2 問は気圧と大気現象、縁海内の水と塩類の循環、第 3 問はプレートテクトニクスと火山活動について出題された。全体として 1~2 行の短めの論述問題が増加しており、計算問題にはやや複雑な数値計算が見られた。第 1 問では証明問題も出題され、思考力や計算力を問われる問題が多い一方で、要求される知識は教科書に記載のなかでも基本的なものが多かった。解答に要する時間は大部分の問題で減少したが、一部の難問でつまずくと時間を要するため、難易度は昨年度と同程度と考えられる。取り組みやすい問題を素早く確実に解き、時間がかかりそうな数値計算は立式だけして計算は後回しにするなど、適切な時間配分で点数を確保しよう。</p>		

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
1	銀河回転の視線速度、ケプラーの法則、星間塵による減光、火星の観測、年周光行差、系外惑星の受熱量	解答方針に悩む問題は少ないが、やや複雑な数値計算が多く、視線速度の式の証明問題で詰まるとさらに時間を消費する。効率的な時間配分を心掛けよう。(計算 7 問、証明 1 問、選択 3 問、論述 2 問(1 行、2 行)、数値 2 問)	やや難
2	大気現象と気圧、縁海の水と塩類の循環、大気にはたらく力、大気の質量、気圧の谷と低気圧、T-S 図	短い論述が多いので、限られた行数での答案作成に慣れておこう。問 2 の縁海は地中海がモデルであることに気づけば、解答のためのイメージもしやすいだろう。(選択 6 問、計算 3 問、論述 7 問(1 行×4、2 行×3)、読図 2 問)	標準
3	プレートテクトニクス、火山活動、地震波の初動分布、アイソスタシー、マグマの発生、地殻熱流量	要求される知識が平易な出題構成であり、効率よく確実に得点したい。論述、計算、描図、選択という多彩な出題形式に慣れておこう。(語句 7 問、選択 11 問、計算 3 問、描図 1 問、論述 3 問(1 行、2 行×2))	やや易

合格のための学習法

東大地学で要求されるのは、初見に近い問題に対する適応力である。問題文から題意を把握する力、データから結論を導き出す力、複雑な計算を続ける集中力、的確な論述答案を短時間で作成する力、粘りなどである。これらを習得するには、東大の過去問を数多く解くとともに、東大プレなど難易度の高い模試に積極的に取り組む必要がある。その際には、難易度に慣れるとともに、時間配分や難易度の低い問題から解き始めるなどの戦略を持っておきたい。また、その地学現象が起こる原因や過程、得られた観測事実と結論の関係を理解するように学習を進めていきたい。